

題目 高レベル放射性廃棄物地層処分地選定を巡る決定プロセスの違いがもたらす影響— 無知のヴェールの有効性—

氏名 立川 渉

指導教員 大沼 進

本研究では、高レベル放射性廃棄物（以下、HLW）地層処分地選定問題を題材とし、NIMBY問題の社会的受容を高める方略を検討することを目的とする。HLW地層処分地選定問題は必ずしも総論賛成各論反対ではなく総論段階でも反対が多い問題である。そのため、決め方についての議論から段階的に社会的受容を検討することが重要である。また、無知のヴェールのアイデアを借りてNIMBY問題の受益-受苦関係を不明にすることが社会的受容を高める鍵となる。そこで、決定枠組みとして方針段階で無知のヴェールの有無を操作し、全国を対象に科学的根拠に基づき絞り込む無知のヴェール条件と今の日本の選定プロセスのように無知のヴェールがない国申入れ条件の2条件を設定し、総論段階、方針段階、立地段階について評価を尋ねた仮想シナリオ実験を行った。仮説1と仮説2では、無知のヴェールの有無が各段階の受容に与える影響および、国民的合意と手続き的公正と受容の段階内と段階間の要因連関について検討した。その結果、どの段階でも無知のヴェール条件の方が国申入れ条件より評価が高かった。要因連関については条件間で違いが見られた。国申入れ条件は総論段階の受容と立地段階の受容が直接関連していた。一方、無知のヴェール条件では、方針段階の受容と立地段階の受容が直接関連しており、方針段階で決め方について受容する重要性が示された。仮説3と仮説4では、無知のヴェールの有無が立地段階の受容に関わる諸要因に与える影響および、その要因連関について検討した。その結果、立地段階の諸要因について、無知のヴェール条件の方が国申入れ条件より高い評価がされていた。平均値比較で立地段階でも諸要因に差が見られたため、方針段階での無知のヴェールの操作が、立地段階でも有効であることが示された。要因連関については初期モデルで仮定していなかった関連が見られた。特に、手続き的公正と感情や信頼は逆向きの関連を示した。つまり、段階的に受容して立地段階に至った際には、手続き的公正は立地段階の先行要因となる可能性が示唆された。以上から、NIMBY問題の社会的受容を検討する際には、立地段階に着目するだけでなく、決め方についての議論から考える必要性について考察した。仮想シナリオ実験を通じて無知のヴェールという規範概念の現実への適用可能性を検討し、合意形成が困難な問題を打開する糸口を示した。